

武蔵野美術大学教授として教鞭を執る長澤忠徳氏。イギリスに渡りデザイン概念の革新となるタンジブル、インタングブルの着眼を持ち帰り、デザイン界に革命をもたらした氏を紹介する。

イギリス留学の先に

図が示した新たな概念

タンジブルーインタングブル

1978年に武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科を卒業後、渡英し英国王立芸術(大学院)大学(RCA)に留学しました。

留学先では、「デザインの意味」を探求するため、「図」の研究に取り組みました。デザイナーにとって「図」は重要な思考ツールであり概念です。例えば、日本人は、地図であれば地面の図、海図であれば海の図だと認識しますが、英語では、それぞれmap、chartと個々に対応した言葉があります。言語の意味は文化的な違いから、たとえ辞書で翻訳された言葉であっても英語と日本語の間には、必ずズレが生じています。

地図や図像という言葉が示すように、「地」という実体があるものをタンジブル。それに対して、図像の「像」はイメージであり、そういう実体のないものをインタングブルといいます。実体

に持ち込んだことです。イギリスでは、美術とは違う科目として、デザインを大学入学資格の主要科目として取り入れています。

1987年、私は英国の盟友たちと、東京とロンドンを拠点に国際デザイン情報シンクタンク「Design Analysis International」社を設立し、活動を開始しました。

ある時、サッチャー首相と面会する機会があり、このデザイン政策について何うと、その政策は日本の戦後復興に做ったと話しました。日本は、イギリスのデザイン産業振興から大きな影響を受けていますが、具体的施策は、英国のようではありませんでした。

日本は器用で、デザイン哲学はドイツから学び、振興政策はイギリスから学びます。そして商業化したプロモ―

のある製造業に対して、実体がないデザイン行為自体はインタングブルであり、情報社会のキーワードです。

RCAに留学していた時代は、イギリスの低迷期でした。イギリスでの就職も結局は就労ビザが下りず、帰国することにしました。1981年のことです。

同年、日本でもデザイン界が動き出し、9月にはAXISビルがオープンします。それは、民間のデザイン拠点として機能し、私は『AXIS』という雑誌の編集にも関わることになりました。そして、積極的にデザインの国際化を仕掛けていきました。

サッチャー首相との出会い
デザインの多様化を促す

1982年、サッチャー首相が約50名のデザイン関係者をロンドンの首相

シヨンに関しては、アメリカから学びました。つまり、折衷主義です。日本はインテグレーションが上手な国だと思いますね。この折衷主義が、日本のオリジナリティーとして、世界に向けて発信されているのです。

リーディング・エッジ展
巻き起こすイノベーション

先にも触れた「Design Analysis International」の5年間の活動では、「リーディング・エッジ展」「イメージ&オブジェクト展」「バルセロナ展」「グレート・ブリティッシュ・デザイン展」など様々な展覧会を次々にプロデュースしました。特に「リーディング・エッジ展」は、イギリスで活躍する新進気鋭の若手デザイナーのプロトタイプを初めて紹介するもので、日本



長澤 忠徳

Tadanori NAGASAWA

武蔵野美術大学学長

www.profile.musabi.ac.jp/pages/2009092.html

官邸に招いてデザインセミナーを開きました。これは低迷してしまつたイギリス経済に新たな革新をもたらすセミナーとなります。彼女は、2つのデザイン振興政策を実施します。一つは、「デザインアドバイザーサービス・ファンデッドコンサルタンシースキーム」です。日本の場合、製造業にはイン

ハウス・デザイナーが多いのですが、イギリスでは外部のデザイン会社に発注します。この振興策では、一度もデザイン発注をしたことがない企業に対して、国が間を取り持ってデザイナーの紹介を行ったのです。その上、相談の初期費用は国が面倒を見るというものでした。6000件もの案件に最適なデザイナーを派遣し、一つずつ経営マインドにも影響する革新を促進したのです。

さらに、もう一つがデザインを教育

におけるデザイン啓発に繋がつたと思っています。

その効果が現れるまでには2年かかりました。日本のあらゆるデザイン誌に取り上げられることで、若手デザイナーを刺激しながら、一般化される情報であれば、彼らの上司も無視はできないでしょう。そうして、毎回、海外の優れた前衛的なデザイン感性を集中的に日本社会に発信し続けました。

当時、日本はバブルの絶頂期にありました。ですから、展覧会を多く開き、デザイン自体のイノベーションに取り組みました。さらに、テクノロジ―が進化することでデザインも生まれ変わります。まるでデザイナーがSF作家であるかのように、一般の人たちが夢見る形、姿を提案し続けた時代でした。

■ながさわ ただのり プロフィール

略歴

- 1978 武蔵野美術大学造形学部基礎デザイン学科卒業、後渡英。
- 1981 英国王立芸術(大学院)大学修士課程修了、後帰国し、事務所を開設、仕事を始める
- 1984~2002 富山県イメージディレクターに就任
- 1986 事務所を法人化、有限会社長澤忠徳事務所・代表取締役となり現在に至る。
- 1987~92 Design Analysis International Limited(本部ロンドン)ディレクター／日本代表に就任
- 1987~2002 通産省グッドデザイン商品選定審査委員に就任
- 1993 東北芸術工科大学設立に伴い、同大学デザイン工学部情報デザイン学科助教授に就任
- 1996 日本デザインコンサルタント協会設立、設立発起人代表幹事に就任
- 1999 東北芸術工科大学デザイン工学部、同大学大学院専任を辞し、武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科新設に伴い、武蔵野美術大学・教授に就任
- 2003~09 武蔵野美術大学・国際部長を兼任
- 2007~11 武蔵野美術大学・学長補佐、企画部長、広報入学センター長、国際センター長等を兼任
- 2011~ 武蔵野美術大学 デザイン情報学科 主任教授
- 2015~ 武蔵野美術大学学長
- 2016~ Royal College of Art シニアフェロー

インタングブルという概念を提唱
デザイン界に革新を生んだイノベーター